

## 《立脚点》の自覚

I・バーリンにおける「精神史」概念に関する覚書  
《アナザー・トリートリス・オヴ・ヒューマン・ネイチャー》  
のための断片的試論（その2）

佐々木 健

日本大学大学院総合社会情報研究科

## Isaiah Berlin's Notion of Intellectual History as an Inquiry into Bases of Thinking

Fragmentary Essays  
towards  
another *Treatise of Human Nature* (No.2)

SASAKI Takeshi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

What is “History of Ideas” or “Intellectual History”? If it is an attempt to probe into one’s bases of thinking as one tries to work one’s way through life and/or philosophical inquiries, how can it be possible that it will work not only as a guide to the “conduct” of life, but also as a branch of knowledge or academic discipline? This is a fundamental question that underlies the discussion of this fragmentary essay.

In this article, main questions of what history of ideas as a branch of knowledge is about and what it is carried out for are considered in particular reference to Isaiah Berlin’s notion of ‘history of ideas’ or ‘intellectual history’. All the material I have used for analysis in writing this is a recently published collection of essays of this most renowned 20th-century British historian of ideas: *The Power of Ideas*, edited by Henry Hardy, Princeton University Press, 2000. By careful examinations of Berlin’s discussion in this anthology, it is made clear that his notion of history of ideas and his concept of philosophy combine to form an idea of a whole body of unified knowledge, and that one of the most important factors that drove him to studies in intellectual history and thoroughgoing analyses of ideas was his appreciation of the vital fact that ideas, when ‘reified’, cease to lead people to the end of their lives, and become an objective, institutional oppressive apparatus with independent physical ‘powers’.

---

### 断片 2

I・バーリンにおける「精神史 = 思想史」概念

#### 1 はじめに

観念の「力」と観念の「暴力」: 観念の「物象化」への警告

「立脚点、立脚基盤の自覚はとことん歴史と論理の両面から自己と自己が置かれている境域を解析するという知的労働の性格を帯びるに至ります。」本紀要2号所収の拙稿「『ここ』ってどこ? 《立脚点》への問い」の最後の部分<sup>(1)</sup>で、筆者はこう述べて筆を擱いた。

私たちの「常識的」な意識や「学問的」な思索を

根底から規定している思考の基盤とは何かという問題に即しながら、「基盤」への問いの一つの表現形態として「思想史 = 精神史」( *history of ideas, intellectual history* )<sup>(2)</sup> というものを想定することが可能である。私たちがものを考えるときの立脚点を自覚する努力を嚮導する方法的な営みとして「思想史 = 精神史」の作業を押えることができるであろう。このようなものとして措定したうえで、「思想史」とは何か、について考察してみよう。「思想史」の構造的な特性や論理的な機制はどのようなものか、そして、いわば「ディシプリン」としての「思想史」が成立するとすれば、それはどのような方向においてなのか。

この断片では、このような設問のもとに、20 世紀イギリスの最大の思想史家と目されるアイザiah・バーリン( *Isaiah Berlin, 1909-1997* )の最近の小論集における議論を手懸りとして、そこにおける彼の「思想史」の考え方をその輪郭において素描することにする。思い切った抜き書きを行い、備忘録・覚書をしたためておく。この単純な作業といえども、「思想史」概念を確定するための理論的探究の道程においては、省略することのできない1つの重要なステップであると言わなければならないであろう。

本稿でテキストとして使用する最近の小論集というのは、エッセイ集『諸觀念の力』<sup>(3)</sup>のことである。このエッセイ集だけを、より正確に言えば、これに収められているうちのごく少数のエッセイのみを、テキストとして使用することにして、そのなかから、バーリンにおける「思想史」概念のエッセンスとも言うべきものを抽出してみようというわけである。

(1) 「日本大学大学院総合社会情報研究科紀要」No.2、2002年1月、p. 16.

(2) 言うまでもなく、「思想史」( = 「觀念史」 *history of ideas* )とは何かを追究した古典的な名著の代表に、A. O. Lovejoy, *Essays in the History of Ideas* がある。ラヴジョイおよびその同僚たちにより刊行され編集された、雑誌 *The Journal of the History of Ideas* および事典 *The Dictionary of the History of*

*Ideas* は、それぞれこの方面での先駆的、本格的な研究活動の嚆矢と評することができる。(ドイツの「思想史」研究家、とりわけ筆者が尊敬してやまない F. ボルケナウや E. カッシーラーについては、本稿では触れないこととする。)

“*history of ideas*”はこれを「觀念史」、「觀念の歴史」、「諸觀念の歴史」、「(諸)觀念の歴史的研究」等などと、また“*intellectual history*”については、「精神史」の他に「知性史」、「知性構造史」、「知の歴史」、「知(知性)〔の在り方〕の歴史的研究」等などと、それぞれ文脈に応じて訳し分けることも可能である。ここでは、特別な場合を除いては、「思想史」ないし「觀念史」、「精神史」と称することにする。

なお、日本の「学界」において、「思想史」「精神史」研究が独立したディシプリンとして成立しにくい事情については、つとに丸山真男が著書『日本の思想』岩波書店の中で重大な問題提起を行なっている。この点は既に周知に属することである。

また、宮川透は著書『日本精神史への序論』紀伊国屋書店、1966のなかで、このタイトルにおける「日本精神史」の範疇をめぐって、次のように述べて読者の注意を喚起している。既に戦前の時代に和辻哲郎がその著書『日本精神史研究』の表題と研究視座に関して、ここでの研究対象が「日本『精神史』」であって「『日本精神』史」ではないことを力説していた。この例に従って言えば、ここで言う「日本精神史」とは決して「日本精神」史ではなくして、「日本における *history of ideas*」、「日本における *intellectual history*」の謂である。その意味で、*history of ideas, intellectual history* は、「日本精神」という《実体的なもの》を撥無して、自己相対化・自己対象化のための論理的地平を切り拓くものである、と。(同著「あとがき」参看)

さらに、1960年代前半に上梓された、「思想史」研究に関わる基本問題を論じた著書と

して、武田清子編『思想史の方法と対象』創文社、1961、および宮川透・中村雄二郎・古田光編『近代日本思想論争』青木書店、1963、の2点を掲げておく。個別研究の面での成果については、本稿のテーマの性格上、ここでは割愛する。

- (3) Isaiah Berlin, *The Power of Ideas*. Edited by Henry Hardy, Princeton University Press, 2000.以下、この小論集からの引用箇所は、本文中に論文タイトルとページ数のみ記すことで明示する。なお、バーリンからの引用文中、ダッシュ〔 〕は、断わりなきかぎり、文意を取りやすくしたり、議論の文脈や文章の係り具合を明確にしたりするために引用者が適宜使用したものである。

編者のハーディがこの小論集に『諸観念の力』という表題を付したのは、次のような事情によるのであろう。ハーディは「编者前書き」の冒頭に、講演「2つの自由概念」の一節を引いている。これは、バーリンが1958年に、フェビアン経済学者、コール(George Douglas Howard Cole, 1889-1959)の後任としてオックスフォード大学ニュー・カレッジの「チチリー社会・政治理論講座」(Chichele Chair of Social and Political Theory)教授に就任した際に行なった著名な記念講演である。

「100年以上も前に、ドイツの詩人ハイネは、諸観念の力を過小評価しないように(not to underestimate the power of ideas)フランス人に警告した。静謐な大学教授の書斎のなかで培われた哲学的な諸概念は一つの文明をも破壊することができる、というのであった。」(ゴチは引用者)

この「諸観念の力」という語句がそのまま表題として使用されているのである。ハーディによれば、ここでハイネの警告の言葉として引き合いに出されているものは、ハイネの『ドイツの宗教と哲学の歴史によせて』(Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland, 1834)のなかの以下の言葉を下敷きにしているという。「あなた方、誇り高い行動の人たちよ、次のことに留意したまえ。あなた方は思考の人たちが操る無意識的な道具であるに

すぎない、この人たちは控えめな静謐さのなかで、あなた方にとっての最も明確な行動綱領さえをも策定してきたことしばしばなのである。」(Editor's Preface, p. )確かに、対応する個々の語句に着目する限り、编者ハーディの指摘は正鵠を逸していない。

しかし、ハイネの「警告」の言葉をわざわざ引き合いに出したときにバーリン自身が想定していたのは、はるかに規模の大きな歴史的事態であった。ハイネが上記の著作の中で言及していることがらに即して言えば、バーリンの脳裏にあったのは、明らかに、フランスとドイツにおける「革命」の性格とあり方の相違ということであった。先に引いた言葉に続けて、バーリンはさらに、ハイネの主張を掲げている。隣国フランスでは「革命」は現実の社会的「革命」にまで進展し、人民は「国王」をギロティンにかけて斬首した。では、ドイツではどうか。確かに、革命は現実の社会の変革という形態を取るに至ってはいない。だがそうであるにせよ、ドイツでは、フランス革命に匹敵する事業を、書斎の中で、哲学者の頭脳の中で遂行したではないか。カントを見よ。彼はその著書『純粹理性批判』をもって「神学」という古い学問(「旧き形而上学」)をギロティンにかけその首を切り落としたではないか。<sup>(1)</sup>

- (1) Two Concepts of Liberty, *The Proper Study of Mankind*, edited by Henry Hardy and Roger Hausheer, Farrar, Strauss and Giroux, 1997, p.192.

ハイネの議論については、久保勉訳『ドイツ古典哲学の本質』岩波文庫、参看。

こうしたハイネの議論との関連において想起しておく必要があるのは、G・ルカーチがフランス語による著作『ドイツ文学小史』(Brève Histoire de la Littérature Allemande)のなかで行なった「ドイツ啓蒙主義」に関する歴史的な性格規定である。

ルカーチは、現実の社会的「革命」を遂行しうる地点にまで至ったフランス「啓蒙主義」に対して、ドイツにおいては、ただ「文学と純粹思想」の領域でのみ「思考の革新」

という形での「革命」をなしえたに過ぎないことにドイツ啓蒙主義の「限界」を認めている。彼によれば、例えば、カントが悟性使用における「公的」使用と「私的」使用の2様の区別を設けたこと、ヴェルナー事件にみられるごとく、時のプロイセン国王、フリードリッヒ大王に表向きは恭順の意を示したことに看取される「制限された臣下の悟性」のあり方に、その限界がまぎれもなく現れている。しかしまた同時に、現実の社会的「革命」の不成就を代償としたゆえに、いな、むしろそうであるからこそ、内面世界での「思想革命」は徹底的に遂行された。「先の先まで考え、とことん形成する」(zu Ende denken, weitem gestalten)という方向で、語の本来の意味でラディカルに、根源的な形で行なわれたところに、「限界」と表裏一体の関係にある「偉大さ」が存するのである。

以上のようなハイネ、そしてルカーチが提示した視点、ないし総括の視座を、「現実の立ち遅れは観念の先行を要求する」「後進国の優位」として定式化し、この観点に立って、「体系学的 = 方法論的」立場から、新たなカント哲学像を提示したカント研究が、1950年代後半の日本に現れた。山崎正一『カントの哲学 《後進国の優位》』東京大学出版会、1957年がこれである。それでは「後進国の優位」とはどのような事態なのか。山崎は、「古き思想を無視しては、ドイツの近代化も行い得ないというドイツの社会的制約」を指摘したうえで、「後進国の優位」(と同時に、その「劣位」)について次のように述べている。

「後進国の後進的制約が、逆に先進国に対抗し、それを凌駕し得るモチーフに転化し得るという事情がここに看取さるべきである。この転化の原理が、カントの『批判』でもあり、ヘーゲルの『止揚』でもあるということが哲学の問題である。」(同著、p. 51。ゴチは原文の傍点部 次の引用も同様)「『後進国』あるいは『先進国』といっても、その先進と後進の別は甚だ多義的なるものがあ

るが、ここでは一応、資本主義生産力のシステム創出の背景にある中産階級の成熟の程度に関してである。『後進国の優位』といっても、マイナスの面があればこそプラスであって、マイナスがプラスに転化したといってもマイナスの面がなくなったということではない。マイナスの面がいつまでもつきまとうことが忘れられてはならぬ。ドイツ哲学の場合でいっても、ヘーゲル以降、……強くそのマイナス面は、ドイツの思想を規定するものとなっているということが重要である。」(同p. 52)。

ちなみに、山崎の言う「体系学的 = 方法論的」(systematologisch=methodologisch)研究とは以下の如し。「本書のめざすところは、カント哲学の《体系的》(systematisch)研究ではなく、むしろ、その《体系学的 = 方法論的》(systematologisch=methodologisch)研究である。カントの批判哲学の体系を解釈しようとするのではなく、カントの批判哲学の体系構成の方法 カントの哲学思索の在り方 をあらわにすることを通じて、カントの哲学の課題とその解答を、カントに即して理解しようとする。研究の中心点は、《成果》(Resultat)としてのカント哲学でなく、むしろ、《生成》(genesis)としてのカント哲学である。」「ひとりの哲学者が、その哲学の課題を設定するのも、またそれに対して応えようとするのも、一定の《思想空間》のなかにおいてであり、一定の《思想空間》のなかからである。《思想空間》とは、そこにおいて思想体系の形成がおこなわれる《場》(Feld)であって、歴史的・社会的に規定せられていると共に、また歴史と社会の進展に方向を与えるものであるというのが著者の仮説である。」(同p. 1)

さらにまた、以上のような山崎の「後進国の優位」の発想を継承しつつ、「思想空間」の概念を「地平」という視点に改作することによって、K・マルクスの哲学を近代西欧哲学以降の問題脈絡のなかから「生成」の現場

に即して捕捉しなおした画期的なマルクス研究が登場した。廣松渉『マルクス主義の地平』勁草書房、である。廣松によれば、マルクスの哲学は近代的な「知」のあり方を根本的に超克した、新たな「知」の地平を開鑿するものであり、そのマルクスにおいて「唯物史観」という新しい「知」のパラダイムこそ「マルクス主義全世界観の地平」の他ならぬのである。

このように押えることができるならば、バーリンが「諸観念」の《power》というときに想定している事態の本質はどこにあるかが明らかになる。一つには、「諸観念」(=「思想」)が現実の社会や歴史に対して実際に働きかけることができ、社会や歴史をその進むべき方向に導くことができる強大な「力」を発揮することができるという驚嘆すべき事実への着目である。もう一つには、その「諸観念」(=「思想」)が人間の意識から独立して、弾みがついて一人歩きを始めたか、どうなるかということである。「諸観念」(=「思想」)が「物神化」(「物化」)されて独自の自己運動を開始し、そのことによって観念=思想が却って人間の精神世界の内面的空洞化を惹き起し、そればかりではなく人間性を踏みじり人間存在を圧迫する制御不能の物理的な「暴力」と化した場合どうなるのか。観念=思想が「物象化」されて「呪物的性格」を獲得する事態に対する不断の警戒心である。観念=思想が、社会や歴史を動かす槓杆ともなりうれば、逆に人間性を踏みじり暴力的な抑圧装置ともなりうるという両義的な性格。それゆえにこそ、観念=思想をそのままに放置しておいてはならず、これを不断に対自化し対象化する意識的、方法的な営みの努力がとことん要請されなければならないということへの力説・強調。このような観念=思想の二面的な特質 この両面を同時に見据えることの必要性を示す言葉がまさに、「諸観念」の《power》という言葉なのである。そして、こうした問題意識こそが、彼の他の多くの論文集<sup>(1)</sup>はもとより このエッセイ集を貫いているバーリンのライト・モチーフであり、そこでの観念=思想の分析作業を支えている基本的なスタンスの重要な

一側面なのである。

(1) バーリンのエッセイ集の主なものに次のようなものがある。

『自由論4篇』(Four Essays on Liberty)

『概念と範疇』(Concepts and Categories)

『流れに抗して』(Against the Current)

『人間性という屈曲した木材』(The Crooked Timber of Humanity)

『ヴィーコーとヘルダー』(Vico and Herder)

『ロマン主義の根源』(The Roots of Romanticism)

『啓蒙主義に対する3人の批判者』(Three Critics of the Enlightenment)

『人類の本来の研究対象』(The Proper Study of Mankind)

いずれも、秀逸なエッセイ集である。タイトルを眺めるだけで、知的な舌鼓を打たずにはおられないし、知的な垂涎を催させられる。ことほどさように魅力的で興味深い(interesting)ものばかりである。考察され論じられている諸対象の世界の中についつい立ち入ってみたい誘惑を禁じることに困難を覚えざるをえない。しかしながら、それと同時に容易に見て取れることは、これらの珠玉の論文がいずれも例外なく、「固焼き煎餅」のようなものであって、賞味するには、読む側に、ちょっとやそこらではぐらつかない強靱な歯と、味が出てくるまで何回でも噛める強力な咀嚼力と、どこまでも倦まず弛まず只管かみ続ける忍耐強い持続力とが要求される、とうことである。

バーリンには、単一のテーマを取り扱い一挙に書き下ろされた単行本と目される著作がほとんどなく、大多数の著作が、講義集・講演集・論文集・エッセイ集、等等である。バーリンの諸作品の特徴は、短期間で一挙に完成された巨大な彫像であるという点にあるのではない。そうではなく、作る側から言えば、いくつもの角度から、今はこの方面を、

次はこの局面をと、彫像がやがては持つにいたるべき多様な側面や相貌や様態を、そのつど素材を変え彫り方を変更することを通して提示してみせながら構築してゆき、このような行程を辿り順を追って全体を作り上げる

しかも、見る側からすれば、制作過程の全範囲に付き合うことではじめて彫像の部分と全体との照応関係がようやく納得のいくような形で仕上げられる 彫塑的な形成物である、という点に存する。長短、大小さまざまな論文、エッセイ、講演、記事、等等、表現形式や考察視点をさまざまに変えながら、巨大な対象世界を順次、脈絡を追いつつ、読者の前に現前せしめて、当の対象の全体的な構造とそれがおかれている位置や境位とを白日の下にもたらしみせる、その精緻な分析力と、着実な構成力と、冷徹に適正な距離を保持できる叙述力と、全体のイデーを常に視界に収めつつこれを具象化せずにおかない雄大な構想力。これこそ、バーリンを第一級の思想史研究者たらしめている知的・精神的資質である。同時にまた、紛れもなく、バーリンの思想史家としての比類なき魅力の一端をなしているもので、それはある。

最後に、私的、個人的な回想を。筆者がバーリンの名を初めて知ったのは、今を去る 30 有余年前に遡る。当時、英米系の貴重な書籍が丸善から(Asian Edition という名であったと記憶している) 廉価のリプリント版として刊行されていた。その中に、イギリスの Home University Library という、文庫本サイズのハードカバーの書籍が含まれており、当時まだ学部学生であった筆者は、これを何点か同時に購入したことがあった。そのうちの 1 点が、バーリンのマルクス論(*Karl Marx: His Life and Environment*, first edition 1939, fourth edition, Oxford University Press, 1978)であった。このとき初めて、バーリンの名を知り、バーリンの文章に接したわけである。今でも脳裏に残っているのは、ロンドンに亡命中のマルクス一家に、庇護者のエン

ゲルスが加わって、ハムステッド・ヒースにピクニックに出かけ、そこで団欒の一時を過ごす光景の描写である。これが殊のほかヴィヴィッドに思われたのは、緩急の多い石畳の坂道を苦勞して上って Highgate Cemetery によろやくたどり着き、墓地のなかを散策した後で、9 月末か 10 月初めの人気のない、荒涼とした Hampstead Heath を彷徨した体験からさほど時間が経っていなかったためであろうか。思想史家の立場に思いを致すならば、こうした亡命家族のつかの間の団欒の光景を見逃さずに、これほどまでの臨場感をもって活写できる根底には、この家族同様に自らもエミグレであるという共苦の感情と心情が働いていたのであろう(バーリン自身、ラトヴィアの首都リガで生まれ、6 歳の時に家族とともにロシアに移り、ボルシェヴィキ革命後の 21 年に一家はイギリスに移住している)。ささやかといえばささやか極まりない、些細といえばこのうえなく些細な、日常性のなかの個別的な details、そこに垣間見られる人間存在の愛すべき実相(その傍らで、無明の間の深淵が大きな口を開いているのかも知れないにせよ) こうしたものに対する温かみのある視線と関心が、あの冷徹かつ厳格極まりない思想分析を安心して信頼を持って読者に受け入れさせる要因として働いているのである。

このマルクス論は、バーリンに分析哲学の研究から思想史研究への転軸を迫るものであり、その点で、彼にとってはエポックメイキングな作品であった。「マルクスの哲学的見解は私には、これといって独創的でも関心を惹くものとも見えなかったけれども、マルクスの世界観の研究に導かれて私は、マルクスの先人たち、とりわけ 18 世紀フランスの啓蒙主義思想家たち(French *philosophes*)の研究に赴いた」と彼は回顧している。(My Intellectual Path, p.4) マルクス論そのものに対するバーリン自身の冷ややかな自己評価にもかかわらず、この評伝については、「改訂を数回経ても叙述のスタイルの躍動性はいさ

さかも失われていない」とピーター・シンガーが 今日では生命倫理の世界的な泰斗と目されるシンガーが 評しているほどである。(Peter Singer, *Marx*, Past Masters Series, Oxford University Press, 1980, p.79) また、*The Power of Ideas* 所収の *The Philosophy of Karl Marx* と題する記事に徴してみる限り、記述の仕方は対象にかなりの距離を設定した冷徹なものであるものの、思想そのものの理解は対象に即した、対象の内部に入り込み対象の全体と諸部分に周到的な注意を払った内在的な理解となっていることは明白である。(cf. pp.115-125)

## 2 「親殺し」としての思想史と「ディシプリン」としての思想史

「天文学」は有史以来人間の知的関心をひいてきた「技術」的な「学」の一部門である。その天文学が 16 - 17 世紀にいたって、メカニズムの原理にたった数学的力学的な基礎付けを獲得して「近代的」な「自然学」としての着実な、独立独行の歩みを開始した。「天文学」そのものが旧来そこに自らの存立基盤を見出し、その上で成長を遂げることができた「形而上学」的前提を振り切って、独立の「専門的」な学問として自己主張を始める局面とその意義に着目しながら、パーリンはこう書いている。

「天文学における諸問題が次のような方向で定式化されたとき、すなわち、観察と実験の方法を使用して、またこれらの方法に依拠することによって明晰な解答が発見されることができ、今度はこれらの解答が一定の構造を持った体系的構築物 その整合性は純粋に論理的ないし数学的な手段によって検証されうるのであって、そうした整合性を持った構築物 のなかで結合され関連付けられうる、そういう仕方定式化されたとき、そのとき初めて、天文学という近代科学は創出されたのである。そうになると、雲霞のような曖昧模糊とした形而上学的諸概念は後に残され、経験的諸事実との関連をもたず、

したがって新しい科学にとってもはや妥当な意味をもたないということで、次第に放逐され忘却されていった。

現代においてもまた、経済学、心理学、意味論といった学問分野、いや論理学そのものさえが、観察に依存することもなければ論理形式に合致することもないものすべてを、徐々に段階的にかなぐり捨てようとしている。……こうして、思想の歴史は長々と続く親殺しの連続なのであって (*The history of thought is thus a long series of parricides*)、そこでは新しい学問分野は、親にあたる諸学科を抹殺し、いまだに自分の内部に残存している『哲学的』諸問題 ということは即ち、問題解決の技術を明確に指示するものをそれ自身の構造のうちに含まないような類の諸問題 の痕跡はどんなものでも自分の内部から根絶することによって、自分の自由を達成しようとする。」(*The Purpose of Philosophy*, p.28)

以上、煩を厭わず引用した。次の2点を確定しておくためである。

第1に、ここで描かれていることは、「近代科学」としての「天文学」の生誕という、思想史的=歴史的事実である。

《*history of ideas*》、《*intellectual history*》を「觀念=思想の『歴史』」および「知性の『歴史』」と仮に理解して、しかも同時に、例えばヘーゲルの『*歴史哲学*』での指摘をまつまでもなく 「歴史」のもとに、「出来事」としての歴史と「記述」としての歴史との二様の区別を踏まえて考えるならば、「思想史」という概念のもとに、客観的な歴史的出来事・事態 (*das Geschehen* としての「歴史」) とそれに関する学的認識の営み (*die Beschreibung* としての「歴史」) との二様の区別を想定することができる。本節の表題に掲げた「親殺し」としての「思想史」は、客観的な歴史的出来事・事態に属し、実際に「近代」思想形成の歴史的段階の初期に生じた事態である。これに対して、「ディシプリン」としての「思想史」とは、学的認識の営みの謂である。上の引用で言及されている事例でいえば、「近代科学」としての「天文学」の生誕は紛れもなく「出来

事」としての思想史に属することであり、(今日、「コペルニクス革命」とか「科学革命」という名で、また「パラダイム・チェンジ」という観点から、総括されている)その「近代的」「天文学」の生誕過程と論理構造を解析する「科学史」のトマス・クーンやアレクサンドル・コイレの業績に代表されるような営みは、「記述」としての思想史、学的認識の営みとしての思想史の一環をなすものである。私たちはこのように、「出来事」としての思想史と「記述」としての思想史とを一応は範疇的に区別して考えることができるであろう。

しかしながら、ここで翻って考えれば、以下のような事情に思いを致す必要がある。出来事としての思想史といえども、もし私たちがその出来事がまさに生起しつつある当の現場に身を置き、その真只中で思索している当の人物たちの立場に立って見れば、どうであろうか。過去のある任意の歴史的段階において生起した客観的な歴史的出来事・事態としての「思想史」とは、実は、そうした《現在性》と《当事者性》という問題局面から捉えなおせば、彼ら・彼女らが置かれている立脚基盤に対してまさに「今、ここで」(hic et nunc)行なわれていた学的認識の営み、あるいは少なくとも理論的な反省・自覚の努力を意味しているのである。それと同時に、逆に、私たちが現時点において行なう学的認識としての「思想史」の研究は、歴史という場面から端的に浮遊した虚空のなかで遂行される非歴史的＝脱歴史的な営みなのであるか。断じてそうではない。歴史的、社会的に規定されながら形成されてきた思考の立脚基盤に対して、歴史がまさに作られる「今、ここで」の局面からする歴史的行為に他ならない。そもそも私たちの学問的認識の営みは、歴史の真只中で行なわれる、それ自体歴史的な刻印を負った事件であるという根本的な特性をもったものである。さし当りここでは、「出来事」として思想史と「記述」としての思想史と、この「両者」の差異性と同一性とを区別しつつ、同時に関連付けておく必要がある。第2点はこうである。

先の引用で言われている個別的専門諸科学と「形而上学」的、「哲学」的前提との関連は、専門分化して独立するに至った個別科学と、諸科学が個別科学

として独り立ちするまでその成長を支えていた共通の基盤との関係として捉え返すことができる。

もともと自己がその上に立っている存立の基盤ないし立脚の基盤を踏まえ、それを問い糺し、そこから離脱する方向で個別科学が成立した。個別科学が一旦個別科学として存立しうるとなると、その「独立」の「成果」の地点から、もとの立脚基盤、ないし自らの出自にあたる以前の存立基盤は捨て去られることになる。これが「親殺し」とバーリンが呼ぶ、個別科学の生誕とその「ハイマート」からの離脱の過程である。その意味で、個別科学の生誕とは、学問の「基盤」からの離脱(「ボーデンロース」になる「地盤喪失」の過程)であり「ハイマートロース」になる事態<sup>(1)</sup>に他ならない。

(1)「親殺し」と言う事態は「思惟は忘恩的なものである」というヘーゲルの言葉と重ねて考えることが可能である。さしあたってここでは便宜的に、「立脚基盤」にあることと、そこから「ハイマートロース」になるという事態とを、ヘーゲルの「直接性」と「媒介性」というカテゴリーを借用して概括しておくことにする。思索の成果としての「科学」は直接与えられたものである「基盤」から離脱して、この基盤にとっては「他のもの」である「媒介」的な「知」の地平に自己を高めているのである。

ヘーゲルは『エンツィクロペディ』のなかでこう書いている。(「エンツィクロペディへの序論」§12注解)

「意識における直接性〔直接的無媒介性〕と媒介性との関係について、……ここでは差し当たり、ただ前もって予備的に次のことに注意を促しておかなければならない。つまり、これら二つの契機が異なったものに見えるようなときでも、二つのうちのどちらも欠くことができないということ、そして両者は不可分に結合しているということ、である。… …媒介とは、〔与えられた第一のものから〕歩み始めることであり、ある任意の第二のものへと前進してしまっていること ein



Fortgegangen sein zu einem Zweiten であり、したがってこの第二のものは、この第二のものに対してひとつの他のもの〔他者〕であるものから、当の第二のものへと移ってしまっている限りにおいて *insofern zu demselben von einem gegen dasselbe Anderen gekommen worden ist* 初めて存在するのである。……

別に大したことを言っている訳ではないが、哲学はその発生の最初の基盤を経験（アポステオリナなもの〔＝後天的なもの〕）に負っている、と私たちは言うことができる。これは丁度、人は食物がなければ食べることが出来ないから、人は食べることを食物に負っていると言うのと同じである。とは言え、こうした関連から言えば、確かに、食べることは忘恩的なものと想い描かれる。というのは、それは自らの存在をそれに負っている当のものを食べ尽くしてしまうからである。こうした意味においては、思惟も食事におとらず恩知らずである *Das Denken ist in diesem Sinne nicht weniger undankbar*。」（*Enzyklopädie* , Suhrkamp Werke, Bd.8, S.56-57.ゴチは原文のイタリック）

ここでは、ヘーゲル的な文脈は一応度外視して、「哲学」を「科学」に、立脚基盤ないし発生基盤（「発生の最初の基盤」）を「第一のもの」、成果として出来上がった「科学」を「第二のもの」と読みかえておけばよい。

そこで、今ここで「個別科学」とその成立のための「立脚」基盤と呼んだものを、思考とその立脚基盤・生成基盤として一般的な形態において捉えておこう。私たちは、これを思考とその基盤、思考とその暗黙の前提との関係として捉え返すことができる。

そうであるとすれば、先刻、「親殺し」と呼ばれた事態に対して、いわば「親探し」という努力的な営みの方向をも想定することが可能となる。抽象的な形で表現すれば、ある観念体系なり個別的な学問分野なりがその本来の存立基盤・成立基盤から離脱して自立し、個別的な思想体系ないし専門的な学問分野として独立したとき、この「独立」を達成しきつ

た「成果」の地点に立って、もとの基盤を論理的に消去することは、原理上ありうることであり、また実際に行なわれてきた。こうした本来のもとの母胎である「ボーデン」「ハイマート」を論理的に切除し消去する事態が「親殺し」の呼称で表現されている次第である。

これとは逆に、一旦出来上がってしまった思想体系ないし学問分野が、離陸して独立したがゆえに「喪失」した「基盤」や離脱してしまった「ハイマート」を求めて、その「系図」を遡りながら自らの根源を探し求めることもありうる。自らの論理的根源、歴史的源泉という本来の基盤＝根拠を探究する根本的な問いかけを、「親探し」の営みと見なすことができるであろう。この「親探し」の営みが方法的に自覚化されて理論的な形態を取ると、「理論の系譜学」（*Genealogie der Theorien*）という構想のもとに、「ディシプリン」としての「思想史」という問題領域＝学的探究の領域を形作ることになる。<sup>(1)</sup>

(1)「親探し」という名の「基盤」＝「根源」への問いかけ、「理論の系譜学」的構想に立つ「思想史（＝「精神史」）」的探究が現実に具体化される方向として、次のごときものが想定可能である。また、実際にそうした方向での探究がこれまで行なわれてきたというのが実情である。

「成果」としての哲学の観点から、その「生成」基盤としての世界観的人生観的前提を問うこと。この点について、先の山崎は言う。「今日においても、なおこれ（＝学説体系の論理的整合性 引用者）のみに学的追求の焦点をおき、これのみに固執するということは、狭量であるというよりは、むしろ自己批判を眠らせた故意の怠惰であるというべく、哲学真理の追求に、真に忠実なる所以ではないということになるであろう。我々は今日、哲学体系の論理的整合性の吟味批判と同時に、その哲学体系の生い立った精神的伝統や歴史的社会的状況の如きを併せて吟味批判する必要があると信ずるのである。」（山崎、前掲書、p. 4.ゴチは原文の傍点

部。)

専門的な個別的学問分野の成立という既成事実を踏まえながら、その生成基盤としての共通の、一般的な形而上学的・哲学的・人間学的前提を究明すること。A. N. Whitehead, *Science and the Modern World* や A. Burt, *The Metaphysical Foundation of Modern Science*, さらに下村寅太郎『科学史の哲学』は「近代科学」の根本前提を根源から問おうとする古典的力作であり、今日的な妥当性をいささかも喪失していない名著である。内田義彦『経済学の生誕』、『作品としての社会科学』等は個別科学となった「近代経済学」について同じような根源的な問いかけを行い、その根本的基盤を復権させようとする企てであり学問的努力である。

学的思考の「出自」をめぐって、その基盤である日常的思考・日常世界を、また、非学的日常的思考に関して、その基盤としての世界観・人生観上の暗黙の了解事項を、それぞれ対自化し意識化すること。

以下に掲げるバーリンの言葉は、哲学という、思考の「純化」と「抽象化」が進んだレベルでの問いかけの営みに即した発言ではあるものの、彼が正面に据え照準を合せている問題は、思考の根底にある暗黙の前提となっている「モデル」、「範疇」といった理論的な枠組みそのものを白日の下にもたらし、ひいては思考そのものの構造自体を徹底的に自覚化し意識化することの絶対的な重要性という問題である。

「これらの〔理論〕モデルは相互に衝突することがしばしばある。モデルのなかには、経験の諸相を、これがあまりにも夥しすぎるゆえに、説明できないために十全でない」と認められ、今度は他のモデルに取って代わられるものもある。とは言え、新しく登場したモデルは、従来のモデルが省略してきたものごとを強調しはするものの、それはそれで、他のモデルが明らかにしてきたことを不明確にしかねないのである。哲学の課題 それは多くの場合、困難

で苦痛をとまなうものである。は、次のような点にある。人間がそれを使って思考する際に隠されている諸々の範疇やモデル（すなわち、人間が使用する語やイメージやその他のシンボル）を解き放ってこれに光を照射すること、範疇やモデルにおける曖昧模糊としたところや矛盾した点をあらわにすること、範疇・モデル相互間の諸矛盾・相克で、しかも経験を有機的に組織し記述し説明する一層十全の方法（というのは、説明はもとより記述も、すべて、記述および説明を行なう際に準拠すべきなんらかのモデルを必要とするからである）を構築することを妨害するような矛盾・相克を見極めること、さらにそれから、なお一層『高次』のレベルにおいて、こうした活動そのものの本性を吟味検討すること（認識論、哲学的論理学、言語分析）そして、この、秩序を異にする、哲学という、活動そのもののなかで暗々裏に働いている暗黙のモデルを白日の下にもたらし、このことである。」(ibid., pp.33-34)

「以上のことがことごとく極めて抽象的で、日常的な経験から隔絶しており、普通の、当たり前の人々たちにとっての中心的な関心事である幸福・不幸・究極の運命といったことさらにあまりにも関わりがなさすぎることであり、もし、こういった異論が唱えられるなら、これに対しては、そうした非難攻撃は偽りであると答えるほかない。人びとは、この森羅万象を自分自身に対して記述し説明しようと求めることなくしては生きていけない。人びとがこれを行なうに当たって使用するモデルは、その生活・人生に深甚な影響を及ぼさずにはいない。人びとが無意識であるときには、とりわけそうなのである。人びとの悲惨や挫折の多くは、様々なモデルをそれらが正しく機能していない場合でも、意図的にはもとより、そればかりでなく、機械的にあるいは無自覚的に、適用することに起因しているのである。政治学における有機体説的なモデルを、あるいは国家を芸術作品に喩える国家像や、特殊な霊的使命を帯びた人間生活の造形者として独裁者を描く指導者観を、現代における全体主義的諸理論が精力的に利用したために、どれほど多くの苦痛が惹き起されたか、わかったものではない。これまでの色々

な時代に、父親の権威〔父権〕という諸範型にしたがって形作られた比喻やモデルを誇張して社会的諸関係に、特に国家支配者の臣下に対する関係、あるいは聖職者の平信徒に対する関係に、大げさに適用することから、どれほど多くの危害が生じ、どれだけの善が生じたかは、誰にわかろうか。

地上における理性に適った秩序に対して少しでも希望を抱けるとしよう。すなわち、様々な人間集団を分っている数多くの多種多様な利益への正当な認識　これこそ、利益が及ぼす諸効果、利益の相互作用（作用の仕方には様々な形がある）とそこから生じる諸帰結を査定し、そのことによって、人びとが生き続け、そのことで他人の同様に中心的な願望や欲求を押し潰すことなしに自分の願望を充足させることができるような、実行可能な和解の途を見出そうとするどんな企てにとってもなくてはならない知識であって、こうした認識　に対して、少しでも希望を抱けるとするならば、それは次のようなことに存する。つまり、これらの社会的、道徳的、政治的なモデルに、そしてとりわけ、これらのモデルの根底に横たわっている形而上学的な範型、しかも当然のモデルがそこに根をおろしている範型に、解明の光をあてること、それもこれらのモデルや範型がその任務に耐えうるかを吟味するために光を当てることに、存するのである。」(ibid., p.34.後半のダッシュは原文)

先に、およびとして整理・総括した「親探し」の方向を踏まえて見れば、バーリンにおいて、「ディシプリン」としての「思想史」という問題領域＝学的探究の領域に固有の探究課題は、「哲学」の課題と本質的に重なってくるのが看取できる。むしろ、正確に言えば、彼において、「思想史」と「哲学」とが区別されるとすれば、追究され分析される思想・観念・範疇等などの「種類」と「抽象度」如何によるのであって、探究の目的、探究の精神はいずれにおいても同一である、あるいは少なくとも同じ方向を志向し同じ方向に収斂している。このように見るのが妥当であろう。「哲学」としての「思想史」、あるいは「思想史」的な方法と精神において追究される「哲学」、これがバーリンにおける「思想史」・「哲

学」の理念である。自己批判的・自己認識的な学的探究分野としての「思想史」概念がここに浮き彫りにされてくる。

### 3 「ディシプリン」として思想史

学的認識の一部門としての観念史

学的認識の一部門としての「精神史」(「知性史」・「知性構造史」)ないし「観念史」(「思想史」)とは何か、またそれはどのような「精神」・「思想」・「観念」を探究・分析の対象としてとりあげるのか「思想史」そのものに端的に関係するこうした論点に、バーリン自身が直接論及した箇所を瞥見してみよう。

「精神史とは何か。それは明晰で自明の概念ではない。」(What is intellectual history? It is not a clear and self-explanatory concept.) バーリンはこの事実の確認から、議論を開始する。何故そうなのか。「政治史」、「経済史」、「社会史」等についてみれば、これらはいずれも、「大概はまず範囲の限定が可能人間存在の特定集団」に探究・考察の範囲を限定して、その構成員の行動・運命に照準しながら、彼・彼女らが「ある一定の特殊な仕方で同胞の生活を変える」うえで演じた役割や相互作用を分析し記述する。また、「諸学術・学芸の歴史」(a history of the arts and sciences)の研究も、原理的には容易である。実際の研究を遂行する際に現実的な困難は伴うにしても、そもそも「技術・技芸・芸術・美術」の概念、「諸科学」の諸概念を規定し論理的に整理する理論上の作業は原理的に比較的困難を伴わずに遂行できるのである。同様に、「政治思想史」「経済思想史」「数学史」「美術史」等は、「それぞれの『技術的な』学問分野のもろもろの歴史」に関する歴史的考察と歴史的記述の営みである。しかしながら、「思想史」の場合は、これらの諸分野と事情を異にする。「これらの〔様々な領域の、様々な〕歴史を単に並列させたり〔機械的に〕結合したりするだけでは、思想史(=観念史)という普遍的探究領域が出来上がるのではないということは、明らかである。」そもそも「観念」という観念そのものの内実と規定とが

ハッキリしていないではないか。(Russian Intellectual History, p.68)

このことを確認したうえで、バーリンは、「思想史」とは何かと大上段に構えた問題設定の仕方を避けて、次の2点を明らかにし、そのことを通じて「思想史」概念の輪郭を描くことによって、問いに答えようとする。第1点は、思想史研究という観点から、どの範囲の設問の仕方までを理論的に容認し許容できるのか、ということ、第2点は、思想史研究が対象とし分析する「一般観念」とは何か、その特徴はどこにあるか、という点である。

第1点について、バーリンはこう述べている。

「〔一步譲って〕次の点は認めようではないか。ある特定の時代の、ある特定の社会で、どのような諸観念〔思想〕が、あるいはもっと漠然とした表現を使えば、どのような態度が広く優勢であったのかを問うことは可能であること。そのうえ、当該社会の歴史における個々の転換点に、この、あるいはあの、〔個別的な〕観念体系が及ぼした影響・感化について憶測することは可能であり、それどころか魅惑的でさえあること。かてて加えて、個々の特殊的諸観念、あるいは諸観念一般によって演じられる役割をば、ある特定の思想学派は誇張し、あるいは過小評価する 観念論者たち、マルクス主義者たち、あるいは実証主義者たちは、この、あるいはあの個人の、この、あるいはあの集団の、頭脳の中に一定の信念や思考様式が存在していなかったならば、革命や戦争は勃発しなかったであろうに、あるいは実際にあのような形態をとることはなかったであろうに、と想定したのは正しかった、あるいは誤っていた

と主張されるかもしれないし、そうした論議が出されるのは正当であること。」(ibid., pp.68-69)

以上のような問題設定、議論の仕方は思想史の研究手法や態度として容認され許容される範囲内にあるという訳である。もとより、この箇所ではバーリンは、ここまでが思想史の研究領域、ここから先はそうではない、という境界線あるいは限界領域を原理的に確定しようとしているのではない。以上のような容認される設問、許容される事態を押えれば、思

想史研究の守備範囲として、どのような領域が想定されているかが自ずから推測され明らかになる、と云うのである。

しかし、その範囲を超出して、観念・思想・「態度」等そのものの根本性格や「発生論」的源泉に関わる問題領域にまで立ち入った場合は、どうなのか。例えば、「そうした諸観念ないし態度はそれ自体が非精神的な行程の副産物であるのか、あるいは逆に、自立的な諸力であって、ただそれ自身によってのみ十分に説明されるものであるのか」という方向での問題の立て方である。観念・思想を「産出」する究極の物は何かという問い自体が、問いとして不適切であるばかりではない。それは、ことによると擬似問題ではないのか。問いとして成立しないのではないか。これがバーリンの基本的な態度であるように思われる。

次に、第2の論点について、バーリンは書いている。

『『一般諸観念』(‘general ideas’)と云うことで私たちが実際に指すのは、信念、態度、心的ならびに情緒的習性 (beliefs, attitudes and mental and emotional habits) のことであって、これらのうちのあるものは漠然として無限定的であり、別のものは結晶化されて、宗教的、法的、あるいは政治的体系、道徳的教義、社会観、心理的性向、等などに高められている。そうした諸体系とその構成要素に共通の諸性質の一つは、次の点である。つまり、かなり多くの科学的命題や常識的命題とは違って、それらのものの妥当性や真理性を精密に定義可能な、一般的同意を得た基準に基いて吟味すること、それどころか広く容認された方法を使って、それらが受容できる、あるいは受容できないことを示すことすら、可能であるとは思われない、ということである。これらのものについて言うことはせいぜい、次のことである。すなわち、これらのものは、あの中間領域、つまり、世論、一般的な知性的・道徳的諸原理、価値基準と価値判断、心的性向、および個人的・社会的態度 要するに、『精神的・知的背景』、『精神的環境』<sup>(1)</sup>、『社会的慣行』、『世界観一般』といった呼称のもとに大雑把にくくられているものすべ

て、日常言語のなかで（これこそマルクス主義の遺産の一部である）イデオロギーと呼ばれることがしばしばあるものを見出せると期待できるあの中間領域において見出されうる、ということである。諸観念の歴史的研究、あるいは『知性構造の歴史的研究』(histories of ideas or 'intellectual histories')が記述し、分析し、そして解明するとされるのは、よく定義されていないが内容豊かなこの領域とこれの変転過程なのである。」(ibid., p.69.ダッシュは原文。cf. The Essence of European Romanticism, p200-201)

(1) この概念については、アメリカの哲学者ジョン・デュウイによる規定を参看。「『精神的環境』("climate of opinion")と呼ばれるものは、私念・憶見 (opinions) の問題につけるのではない。それは、情緒および意思の態度はもとより知性の態度をも規定し決定する文化的慣習に関わることからなのである。」(John Dewey, *Reconstruction in Philosophy*, Enlarged Edition WITH A NEW INTRODUCTION BY THE AUTHOR, Beacon Press, 1948, p.xix. cf. p.xxix)なお、デュウイは「慣習」のもとに、ヒューム的な "habit" の概念とともに、アリストテレス的な「ヘクシス」の概念をも含めて考えている点に留意しておきたい。

また、前節の注でふれたホワイトヘッドは、「古代」とも「中世」とも異なった「近代」的な意味での自然探究を産み出すのに好適で、恰好の時代精神とも言うべき諸条件を把握するには、「climate of opinion」に着目すべきであることを指摘して、次のように述べている。「歴史を読み解き理解するには、2通りの方法がある。新しい時代へと下る道と、古い時代へと遡る道とである。思想史 the history of thought の場合、私たちにはどちらの方法も必要である。精神的環境 a climate of opinion は、これを理解し認識しようとするれば、それに先立つ諸条件とそれから生じてくる諸結果とを〔ともに〕考察することが不

可欠である。」(op. cit., p.4. cf.p.21)

バーリンが構想し想定している「ディシプリン」(=学的認識の一部門)としての「思想史」概念の輪郭と側面を、2つの論点に即して瞥見した。それでは、以上のような基本性格を付与されている「思想史」研究とは、一体、何のために行なわれ、何を「目的」(テロス)として想定しているのであろうか。この点を明示するのが、「哲学」であって、その限りにおいて、バーリンにあっては、「哲学」研究と「思想史」研究とは同じ問題群の表と裏という、もともと不可分離のものをなしているのである。先に、「哲学」としての「思想史」、あるいは「思想史」的な方法と精神において追究される「哲学」と評した所以である。「哲学」の「課題」と「活動」に触れた以下の2つの文章のなかに、バーリンにとって哲学とは何を意味するか、その根本のあり方と性格とが表出されている。

「哲学者たちの永続的な課題は、諸科学の方法や日常的観察の方法による解明をうけ難いと思われるどんなものをも、例えば、諸範疇、概念、モデル、思考や行動の様式、そしてこれらのものが相互に相克し衝突する個々の個別的な仕方を検討すること、しかも、他の、内部脈絡的に矛盾のより少ない、そして……より曲解されにくい、比喩、イメージ、シンボル、および諸範疇体系を構築する方向で吟味することである。混乱、悲惨、および恐怖の主要な原因の一つ\*は、その心理的な根源や社会的な根本が何であろうと、使い古した手垢だらけの概念・想念に対する盲目的な固執、いかなる形態であれ批判的な自己吟味に対する生理的な嫌疑、私たちがそれによって生き、またそのために生きる生活手段と人生目的に関する理性的な分析をほんのわずかの程度の分析でも妨害しようとする血迷った努力である。このように想定することことは、確かに、理性に適った仮説である。」(The Purpose of Philosophy, pp.34-5)

\* 「主要な原因の一つ」: 原文は one of the principle causes. principle はどう見ても誤

植であろう。principal causes と読む。

「社会的に見て危険な、知性の要求の点からは困難な、往々にして苦渋に満ち報われないことの多い、しかし必ず常に重要な、このような活動は、哲学者たちの営みである。哲学者たちが、自然諸科学を取り上げようが、道徳問題を論じ政治的争点を論じようが、あるいは純粹に個人的な事情を取り扱おうが、そうなのである。哲学の目標は常に同じである、つまり、人びとが自分自身を理解・認識し、こうして、暗黒の蒙昧のなかで当てどなくさ迷うのではなくして白日の下での開かれた場面で活動することを助けること、なのである。」( *ibid.*, p.35 )

近代の「啓蒙主義」に対する現代における最も手ごわい批判者の一人でありながら、「啓蒙主義」が唱導した理性・知性の自律に対して揺るぎない全幅の信頼を寄せ、観念・思想のあり方を根源的に批判し分析するにあたっては少しの情け容赦も示さず微塵の感情的要素も挟まない厳格極まりない批評家でありながら、人生の本来の目的を闡明し人生をその目的へと嚮導する観念・思想の「力」を満腔のロゴス的・パトスの共感をもって強調してやまない、自由な理性的 = 知性的自律人がここに屹立しているのである。

[バーリンは Oxford 大学初の、大学院専用のカレッジ graduate college である Wolfson College が創設されるや、その初代学寮長に就任した。founding President を務めたわけである。その Wolfson College の、ある年の夏の夕映えに染まった中庭をまなかひに想い起こしつつ擲筆。]